



学校は「自ら進んで学習に取り組む意欲」を高めなければならない。

期末テストが終わりました。ご家庭でのお子様のテストに向かう姿勢はいかがだったでしょうか。学習・人権委員会の家庭でのテスト勉強時間に関する調査では、テスト勉強0時間の生徒は一人もいなかったようです。1年生の教室をのぞくと、始業前から教科書を広げて友だちと問題を出し合ったり、ワークを解き直したりしている生徒の姿が見られました。小学生の時は丸腰でテストに臨んでいたのが半年の間にかなりの成長です。学習を進めていくうえで最も大切な「学びに向かう力」が身に付いてきたようです。



今回のテストをもって前期の評価が確定していくことになります。ただ、評価は中間テストや期末テストだけで決まってしまうわけではありません。もちろんテストは評価の材料の一つではありますが。生徒に学力が身に付いているのかどうかは、テストの点数だけに現れるものでもないし、私たちが目指している教科の目標もテストの点数を上げることだけではないからです。

教育の基本が示してある教育基本法。その第6条（学校教育）には、「2. 前項の学校においては、教育の目標が達成されるよう、教育を受ける者の心身の発達に応じて、体系的な教育が組織的に行われなければならない。この場合において、教育を受ける者が、学校生活を営む上で必要な規律を重んずるとともに、自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行われなければならない。」とあります。私の解釈ですが「中学生の発達段階に応じた教育課程を、安心安全な教育環境の中で、主体的に学びに向かう力を身に付けさせることを重視しなさい」とでも読み取れるのでしょうか。

ご覧のとおり学力を上げること自体は条文に明記されておらず、「主体的に学びに向かう力」を身に付けることで、いくら時代が変化しようとも、その時々で学び続け、その時代に合った答えを見つけたり創り出したりすることができるようにしましょうと謳ってあるのだと解釈します。変化の激しい時代ですから、今得た知識が大人になっても通じるかどうかは分からないので、学び続ける「学びに向かう力」が大切なのだと思います。



今回のテストもしかりです。たとえ今、勉強したことがテストの点数として現れなかったとしても、悔しいと思う気持ちや、次こそはと更に意欲を燃やす気持ちをもつことができたなら、それこそ教基法でいう「学びに向かう力」そのものではないかと思います。

保護者の皆様も、テストの点数だけを見てお子様を褒めたり叱ったりしないでください。褒めるべきはテストに向けてどれだけハマって勉強したかです。たとえ前回の中間テストより点数が下がっていたとしても前回より頑張っていたとしたら、その姿勢自体を褒めていただくと、次の後期の中間テストではもっと頑張ろうとする「学びに向かう姿」がご家庭でも見られるのではないかと思います。

裏面に発達心理学や教育心理学のキャロル・S・ドゥエック教授（スタンフォード大）らが行った「褒め方が子どものモチベーションや成果に与える影響」に関する研究の概要を紹介します。子どもへの声掛けや褒め言葉がいかに重要か興味深い結果が出ています。